

ことばの総合教育の中で*

広島大学 山 田 純**

本誌 100 号記念号で、まだ研究歴 5 年の新参者 (new-comer) であると述べた。それから 4 年を経た現在、もはや新参者だと言って甘えるわけにはいかないだろう。何か建設的な貢献をしなければ……。そんなプレッシャーを感じながら私の読書教育学の考え方もこの 4 年間に大きく変わっていった。以前は読書教育学の迷路の中で、“learning reading by reading” という基本原理を “studying teaching of reading by teaching of reading” に変えて金科玉条としながらも、もがき喘いでいた。その後、迷路からしばし飛び出て、ことばの教育の迷路へ旅立った。その旅のおもしろさを小著『子どものことば——小さなことばの不思議』(有斐閣新書) として公刊した。

ここから私は新しいスタートを切ることになった。話しことばは子どもが自ら自然に学び、書きことばは大人が意図的に教える——これが常識である。しかし、この常識を疑い、ことばの総合教育という新たな視点を得るに至った。そこには 2 つの仮説(事実?) の確認の結びつきがあった。以下では、この経緯を述べる。学会員の方々のご示唆をいただければ、と思う次第である。

第 1 は、以前から漠然とは聞いていたが、話しことばの能力に大きな個人差があり、それが家庭の言語環境差によるらしいということである。米国の anthropological (ethnographical?) linguist の Heath (1982) によれば、白人中流階級、同労働階級、黒人労働階級の子どもの言語能力差は大きい。親の教育熱心度は同じでも「教え

方」の違いが歴然としている。私は、Heath の 3 階級をそれぞれ A 型、B 型、C 型と呼び、黒人・白人、中流・労働ということばを使わずに、幼稚園教師の研究会(新幼児教育研究会、1986 年 8 月 2 日広島大会)で、望ましい言語環境はどれかを尋ねた。その結果、A 型、B 型、C 型の得票はそれぞれ 83 名 (47%)、60 名 (34%)、35 名 (20%) となった。望ましい言語教育観がまちまちだという事実、私はショックを受けた。B 型教師は図で B 型指導を、C 型教師は C 型指導をするであろう。日本の幼稚園にも Heath の 3 型が存在しそうだ。日本の家庭はどうだろう。確かに、日本人の 90% は中流意識をもつ(『朝日新聞』1980 年 8 月 25 日)。しかし、それは意識であって、家庭構造は 3 型に分類し得ると思われる。

私は、日本人幼児の言語能力差の大きさを肌で感じたいと思い、ある幼稚園の年長クラスで担任教師につきの口頭質問をしてもらった。「馬が赤いエンジンをおいしそうに食べているきつねにかみつきました。エンジンをおいしそうに食べていたのはだーれ？」すると、choral reading のような「うまー！」という大きな声に交じって 2~3 人 (10%) の「きつねー」という声も聞こえた。その他の文についても同じく、文意の分かる子どもと分からない子どもがいた。さらに興味深いことに、年中クラスでもよく似た結果が得られた。年齢差はそれほど大きくないようなのである。では、差はどこから来るのか。家庭環境差ではないのか。今、このことを調べようとしている。

第 2 は、そのような言語能力差が就学後は学業差となっていく点である。学校の言語環境は A 型最右翼である。Heath によれば、B 型の子どもは小学 3~4 年頃

* An integrated language approach and the teaching of reading.

** YAMADA, Jun (Hiroshima University)

から学業成績が落ちてくる。C型の子どもは小学1年の時から大きな困難に遭遇し、小学途中で dropout していく子どもが増える。同じことが日本の小学校で繰返されているのではなからうか。もしそうなら、これは教育全般の根幹を成す大問題である。すなわち、卒園までに小学校言語に対応できる能力を保証するという課題が与えられたことになる。

しかし、厄介なことに、家庭に3型、園に3型あって、その組合せは9通りあるが、家庭をB型・C型からA型に変えることは不可能に近いし、園でもそれは難しい。教師でさえ、長年培ってきた自分の言語様式を変えることは難しい。さらに、基本的には家庭の影響力は強い。仮に、家庭C型+幼稚園A型で幼年期を過ごす子どもがいれば、どの程度の確率で小学校A型最右翼に順応できるか。

ともかく、まずは、日本のA型家庭から言語活動のエッセンスを得、つぎに、幼稚園のB型・C型の教師にそれを体得させて、実践できるようにしなければならない。そして、入園前にB型、C型だった子どもが卒園してどうなるかの縦断的研究をしなければならない。

では、A型のエッセンスとは何か。A型家庭では母親が絵本読みをする。しかし、B型家庭でも絵本読み活動自体は頻繁になされる。根本的な違いは、文脈分離化 (decontextualization) であろう。Reading ができるためには、この文脈分離化ができなければならない。これは単に発話をモーラに分解できるといった下位レベルに限定されない。先に述べた“learning reading by reading”は、読むことによって、この読むことに必要な分離化を学ぼうという態度である。ところが、A型母子間の話しことばのやり取りの中でもこの文脈分離化はなされる。そうすると、初期読書活動と音声言語活動と比較して、どちらが分離化をやさしく教えられるか、という疑問が生まれてくる。現実には、A型家庭では、書記言語と音声言語がうまく織りなして、学習が進行するよう

である。この隠れたカリキュラム——それがことばの総合教育であるが、これを幼稚園に導入すれば、A型の子どもが育てられるのではないか。人間の血液型は変えられない。しかし、子どもの若いことばという血は変えられるのではないだろうか。もしそれができれば、それは真の教育と言えよう。これはきわめて大きなチャレンジングな課題である。

英米では、このような研究が大いになされてきたし、今後もそれは続くであろう (例えば、Wells, 1985)。しかしながら、わが国では、少なくとも私の知る限り、そのような研究はなされていない。ことばの総合教育は、読書教育を強く意識しながらも、大衆的見地からそれに迫まる。9年前の私は、*linguist* (?) であった。そして、日本読書学会に入り、新参の *reading specialist* となった。それから今は、再び *linguist* に戻った感じもする。しかし、今は、ことばの総合教育という遠大な目標がある。もとより、このような目標は一人の力ではとうてい達成できない。学会員の方々も是非ご一考いただき、研究に着手されるならば、21世紀の日本は明るい。しかし、賛同が得られなくても、一人でもこの研究を行いたい——わが国の読書教育学、言語教育学、そして教育学一般に重大な波紋を投げかけるのではないか、と思う今日この頃である。

参考文献

- Heath, S. B. "What no bedtime story means: Narrative skills at home and school," *Language in Society*, 1982, 11, 49-76.
- Wells, G. *Language development in the preschool years*, Cambridge: Cambridge University Press, 1985.
- 拙著『子どものことば——小さなことばの不思議』有斐閣, 1985年。

(筆者は第14回読書科学研究奨励賞受賞者)